

学校だより
「まんだ」
No.18

自他を大事にする子供 学び続ける子供 共に未来を切り拓く子供



認める力

やりぬく力

表現する力

「命」をどう感じさせるのか？

久しぶりに理科の授業をさせていただきました。5年生の時間をもらって、「人のたんじょう」という授業をしたのです。命にかかわる内容にもかかわらず、実験・観察がしづらいため、どうしても調べ学習だけで終わってしまい、「命」を実感しづらいという課題があります。（「命」を実感させるというのは、理科教員としての永遠のテーマ！）

『わずか、0.000003g（針の先ほどの大きさ）の受精卵が、38週間かけて、およそ3000gまで成長して産まれてくる。なんと10億倍に成長！』・・「すげー」とは思うものの、「命」を実感するとまではいきません。実際に黒い画用紙に針の孔をあけさせて、小ささを実感させてみるものの、それが生き物ではないため、命の実感には至りません。さてどうしたものか。

次の日、5年生の子供たちは、口々に「私3600gだったそうです。」「私は2800gでした。」と嬉しそうに報告してくれます。もちろんそれは、3600gで生まれてきたからうれしいのではなく、おうちの方から自分の話を聞いたことがうれしいのです。

「人の子どもは、母親の子宮の中でどのように育って産まれてくるのだろうか。」と考える中で、子供たちが見つけた疑問は、①どのように体が作られていくのか？と、②およそ10億倍に成長するために、どうやって養分を得ているのか？の2つです。これは、タブレットや本で調べればわかること。しかしそこに、おまけの問題として、「体の変化、体調の変化、気持ちの変化を聞き取って調べよう。」というのを付け加えました。「気持ちの変化」というのは、心の問題であって、科学に心を持ち込むなんてタブーです。

それでも私は、「命」を実感するのは「心」であると信じています。そして、科学+心=理科だと思っています。

5年生の保護者さん。子供が家で自分が生まれてくるまでのことを聞いてきたら、その当時の気持ちも含めて語って聞かせてください。教科書にはない、オリジナルの調べ学習ができるでしょう。

持久走に意志を感じる！

毎日どこかの学年が、持久走の練習をしています。持久走大会前は、どこの学校でもある光景かもしれませんが、万田小の持久走の練習には、子供たちの「意志」を感じます。先生から怒られるからとか、遅いと恥ずかしいからという後ろ向きの考え方ではなく、自分の記録に挑戦しようとか、歩きたくなったらあと少し頑張ろうという自ら成長させようとする前向きな意志を感じるのです。それは、走っているときの足取りというか、表情というか、全身から出る覇気というか・・とにかく、本当はきつくて嫌なはずなのに、それを受け入れ乗り越えようとする意志が見えるのです。

10月24日発行の学校だよりNo.11では、「歩き方を見ると心がわかる！」と書きましたが、今回は、走り方を見ると意志を感じます。

明日、1月31日（土）は持久走大会です。多くの方に応援いただければと思います。



「幸せを感じるもの」という話

卒業を前に、6年生の子供たちに話をしました。みんなが考える「幸せ」とは何か？すると、「家族がいること」「おいしいご飯を食べるとき」「寝ているとき」「当たり前のことができること」など、いろんな答えが返ってきました。つまり、「幸せはこれだ！」という何か特定のものが実体としてあるわけではないということです。だから、「幸せ」は与えることも奪い取ることもできない。幸せを感じるものだということをわかってほしいと思ったのでした。そして、幸せを感じる最も簡単な方法が、「ありがとう」をたくさん言うことだと言いました。「ありがとう」をたくさん言うということは、自分を支えてくれている人がたくさんいるということです。それに気づくことは幸せなことです。友達、先生、保護者の方々に、「ありがとう」をたくさん伝えて、卒業していったほしいと思います。私も6年生に「ありがとう」を伝えよう。